

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果概要について

宇都宮市立上河内西小学校

家庭や地域から「信頼される学校」であるためには、学校の状況や児童の実態を保護者や地域の方々に十分御理解いただく必要があり、その上で、家庭や地域と一体となって児童を育てることが大切であると考えています。

こうした考え方から、令和7年度「全国学力・学習状況調査」における本校児童の学力や学習状況の概要について、以下のとおり公表します。

また、調査結果は、学習指導の工夫・改善に役立てることが大切ですので、調査結果の分析、指導の改善策などを併せて掲載します。

【調査の概要】

1 目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況等の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査期日

令和7年4月17日(木)

3 調査対象

小学校 第6学年（国語、算数、理科、児童質問調査）

中学校 第3学年（国語、数学、理科、生徒質問調査）

4 本校の参加状況

① 国語	13人
② 算数	13人
③ 理科	13人

5 留意事項

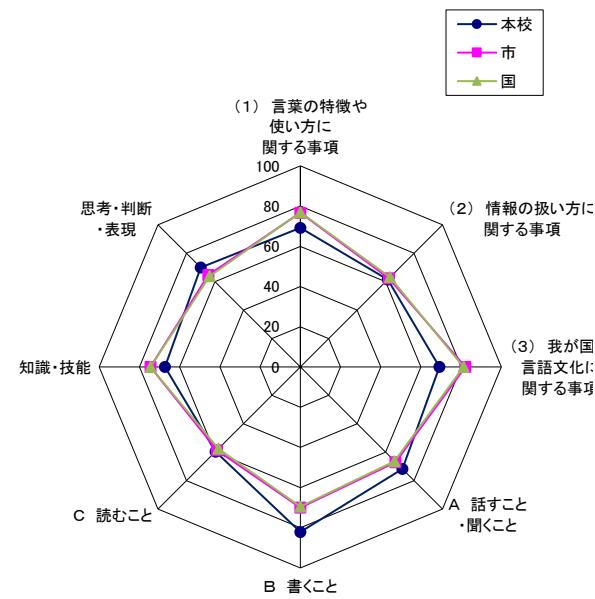
- (1) 本調査は、対象となる学年が限られており、実施教科が国語、算数、理科の3教科のみであることや、必ずしも学習指導要領全体を網羅するものではないことなどから、本調査の結果については、児童が身に付けるべき学力の特定の一部分であることに留意することが必要となる。
- (2) 本校の傾向等を分かりやすく示すために分類・区別の平均正答率などを公表した。
- (3) 平均正答率の数値は調査結果のすべてを表すものではないため、「本年度の状況」、「今後の指導の重点」などの分析を併せて記載した。

宇都宮市立上河内西小学校第6学年【国語】分類・区別正答率

★本年度の国、市と本校の状況

【国語】

分類	区分	本年度		
		本校	市	国
領域等	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	69.2	76.7	76.9
	(2) 情報の扱い方に関する事項	61.5	62.4	63.1
	(3) 我が国の言語文化に関する事項	69.2	82.1	81.2
	A 話すこと・聞くこと	71.8	67.0	66.3
	B 書くこと	82.1	70.0	69.5
	C 読むこと	59.6	58.6	57.5
観点	知識・技能	67.3	74.5	74.5
	思考・判断・表現	70.0	64.6	63.8
	主体的に学習に取り組む態度			



★指導の工夫と改善

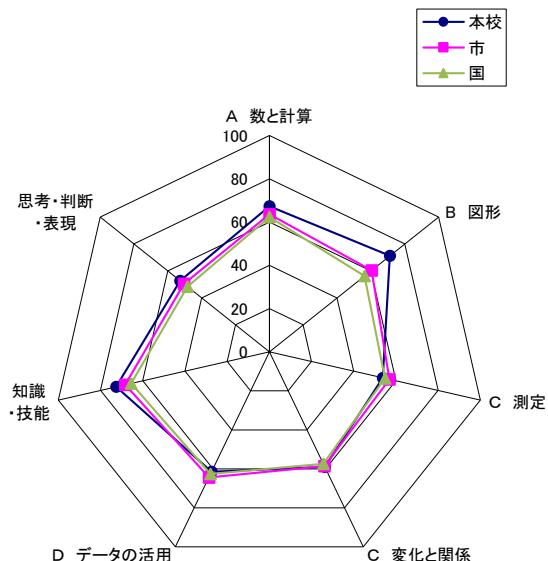
分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	平均正答率は、市や全国の平均より低い。 ●同音異義語を文脈によって適切に使い分けすることに課題が見られる。	・字形の似ている漢字や間違やすい漢字を取り上げたり、漢字の意味を考えながら練習させたりして習熟を図ることで、正確に漢字を覚えることができるよう指導していく。 ・文章の意図を正しく理解し、同音異義語を正しく書くことができるよう指導していく。 ・語彙力を高めるために、新出語を使って短文作りをしたり、意味調べの機会を多くとるようにしたりしていく。
(2) 情報の扱い方に関する事項	平均正答率は、市や全国の平均よりやや低い。 ●情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことに課題が見られる。	・授業中に、実際にメモを取ったものや調べたことを整理する機会を意図的・計画的に設定し、図や記号等を使って情報を整理しながら分かりやすくまとめ、表現する仕方について丁寧に確認しながら指導・支援をしていく。 ・本や新聞、雑誌、インターネットなど様々なメディアから情報を得る際は、目的に応じて中心となる語や文を捉え、必要な情報を見つけ、正しく読み取ることができるよう指導していく。
(3) 我が国の言語文化に関する事項	平均正答率は、市や全国の平均より低い。 ●時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことに課題がある。	・社会の日本の歴史の学習との関連を図り、文字(漢字・片仮名・平仮名)の成り立ちや、文学史についての知識を広められるように教科横断的な指導をしていく。 ・古文や漢文に親しみ日本語古来の言葉のリズムを感じ取らせたりしながら、音声言語としての言葉の学習を充実させるような学習指導を計画的に取り入れて行っていく。
A 話すこと・聞くこと	平均正答率は、市や全国の平均より高い。 ○目的や意図に応じて情報を相互に関連づけ、伝え合う内容を検討することができている。伝える相手や目的を考えながら話す活動を授業の中に取り入れている成果だと考えられる。 ○自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができている。友達の発言をまとめ、紹介するという活動を行うことで、聞く力が高まっていると考えられる。	・国語の授業だけでなく、他教科や学級活動等の話合いの中で、話し方、聞き方の指導を引き続き行っていく。話合い活動を通して、お互いの意見を聞き入れ合い、まとめていく経験を重ねられるよう、意識的にそのような場面を設定していく。 ・相手の話を聞き、自分の考えをまとめ伝える力がさらに付くように、伝えたいことを落とさないように、話す内容を整理したり、分かりやすい構成で話したりできるよう指導していく。
B 書くこと	平均正答率は、市や全国の平均より高い。 ○目的や意図に応じて、事実と感想、意見などを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができている。書く活動を授業の中に多く取り入れてきた成果だと考えられる。 ○図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができている。	・文章全体の構成を意識して、読み手に分かりやすい文章を書くことができる指導をしていく。 ・文章を書く際には、表現の仕方を工夫させ、理由を明確にしながら書く練習を多く取り入れていく。 ・授業中だけでなく、各行事の振り返り、日記など、日頃から自分の考えを書く活動を多く取り入れ、自分の意図を分かりやすく相手に伝えることを意識して文章を書くことができるようする。
C 読むこと	平均正答率は、市や全国の平均よりやや高い。 ○目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができている。「なぜこの情報が必要なのか」「この情報を使って何をしたいのか」という具体的な目的を考えながら、文章を書いたり、読んだりする活動の成果と考えられる。 ●時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、大まかな内容を捉えていくことに課題が見られる。	・文学的な作品の文章だけでなく、身近なパンフレットなどを活用して情報発信者の意図を正しく読み取る学習にも取り組んでいく。 ・物語や説明文とほかの資料を関連付けて読み取る力を高めるために、プレゼンテーションなどを行う際に、新聞やインターネットからの情報を内容と結び付けて表現するような指導をしていく。 ・初めて読む文章に関して、目的意識をもって読み、キーワードを見つける力を伸ばせるよう、今後も指導を続けていく。 ・授業だけでなく、朝の学習等で新聞記事を活用して、書かれている内容を要約する機会を増やしていく。

宇都宮市立上河内西小学校第6学年【算数】分類・区別正答率

★本年度の国、市と本校の状況

【算数】

分類	区分	本年度		
		本校	市	国
領域	A 数と計算	67.3	63.6	62.3
	B 図形	71.2	60.4	56.2
	C 測定	53.8	56.9	54.8
	C 変化と関係	59.0	58.6	57.5
	D データの活用	61.5	64.4	62.6
観点	知識・技能	72.6	68.3	65.5
	思考・判断・表現	52.7	50.4	48.3
	主体的に学習に取り組む態度			



★指導の工夫と改善

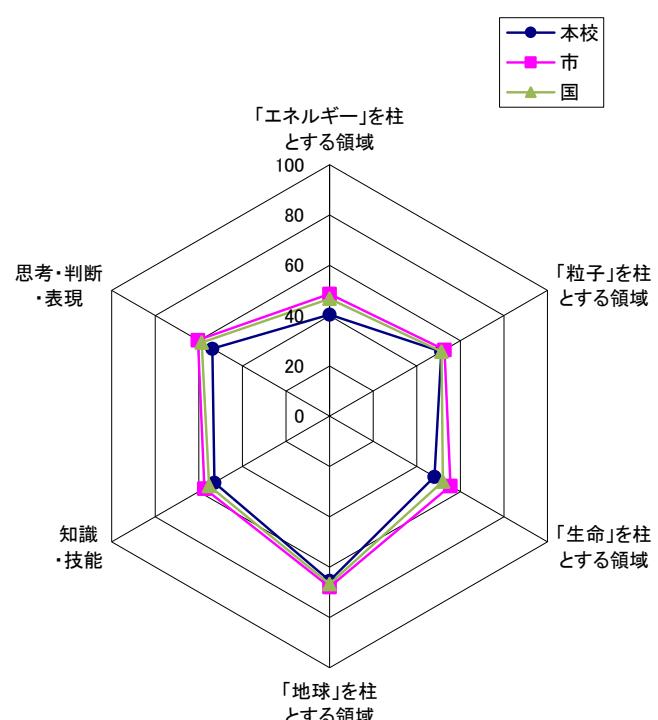
分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
A 数と計算	平均正答率は、市や全国の平均より高い。 ○異分母の分数の加法の計算の正答率が100%であった。 ●棒グラフから、項目間の関係(何倍になっているか)を問う設問の正答率がやや低かった。どちらをもとにしているのかが分からぬ児童や、何倍かをひき算で求めてしまう児童がいる。	・何倍かを求める時には、基準値を明確にし、わり算で求めることを3年生から継続して指導していく。 ・一斉指導だけでなく個別指導も行い、一人一人の理解度に応じた支援をしていく。
B 図形	平均正答率は、市や全国の平均より高い。 ○図形の設問が4問あるが、4問とも正答率が市や全国の平均より高い。特に、角をつくる2つの辺をそれぞれのばした图形の角の大きさについて問う設問の正答率が高く、実際に作図したり、图形を作ったりする活動を授業の中に取り入れることで、图形への理解が深まったと考えられる。	・基本图形の面積の求め方をしっかりと定着させる。
C 測定	平均正答率は、市や全国の平均より低い。 ●上皿自動ばかりの目盛りを読む設問の正答率が低い。ばかりの一番小さい1目盛りが5gであるのに10gとして読んでしまう児童が見られた。	・ばかりや数直線の1目盛りの大きさを読み取る問題を丁寧に指導するようとする。特に、ばかりの目盛りの読み方は、はさみ込みの考え方を大切にするようとする。
C 変化と関係	平均正答率は、市や全国の平均とほぼ同じである。 ○伴って変わる2つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見出し、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述することができている。朝の学習の時間等を活用し、多くの問題を繰り返し解くことで、理解が深まったと考えられる。 ●「10%増量」の意味を理解し、「増量後の量」が「増量前」の何倍になっているかを問う設問の正答率が低い。	・「増量」の意味を理解できていない児童が多く見られる。日常生活での具体的な場面を使って、様々な割合の問題に取り組むようとする。
D データの活用	平均正答率は、市や全国の平均よりやや低い。 ●簡単な二次元の表を読み取り、条件に合った項目を選ぶ設問の正答率が低い。また、目的に応じて適切なグラフを選択し、出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述することに課題がある。	・問題文に線を引くなどして、正確に読み取るように指導する。また、複数の条件を把握する問題に取り組むようとする。

宇都宮市立上河内西小学校第6学年【理科】分類・区分別正答率

★本年度の国、市と本校の状況

【理科】

分類	区分	本年度		
		本校	市	国
領域	「エネルギー」を柱とする領域	40.4	48.6	46.7
	「粒子」を柱とする領域	51.3	52.8	51.4
	「生命」を柱とする領域	48.1	55.5	52.0
	「地球」を柱とする領域	65.4	67.9	66.7
観点	知識・技能	52.9	57.5	55.3
	思考・判断・表現	53.8	60.4	58.7
	主体的に学習に取り組む態度			



★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
「エネルギー」を柱とする領域	平均正答率は、市や全国の平均より低い。 ○電流がつくる磁力を強めるためにコイルの巻数の変え方の記述ができる児童が多い。実験結果から考察する力が身に付いていると考えられる。 ●アルミニウム、鉄、銅の性質や電気を通す物と通さない物の理解や、乾電池のつなぎ方について課題が見られる。	・電気を通す物と通さない物の共通点を理解したり、実験を取り入れたりして、基礎知識を身に付けられるようにする。 ・ICT機器の活用を充実させ、視覚的に理解できるようにする。 ・ペアワークやグループワークで児童同士で用語の意味を確認し合ったり、教え合ったりする機会を設ける。
「粒子」を柱とする領域	平均正答率は、市や全国の平均よりやや低い。 ○日常生活における事象について、知識と関連させて考えることができている。実際に実験や観察を行い、目で見て確かめることで、より理解を深まると考えられる。 ●水の温度による体積の変化についての理解について課題が見られる。	・環境問題に目を向けて関心をもてるようにする。 ・日常生活における事象や環境問題を知識と関連させて授業に取り入れる。 ・実験や観察したことを既習の内容や生活経験と関連付けて、結論を導き出す学習過程を実践する。
「生命」を柱とする領域	平均正答率は、市や全国の平均より低い。 ○顕微鏡で観察するときの操作方法を理解できている。児童は、実際に身の回りの生物を顕微鏡で観察することの経験から技能が身に付いていると考えられる。 ●ヘチマの種子が発芽する条件についての理解が不十分である。 ●問題に対して適切に記述をすることが不十分である。	・観察により集めた情報と友達の記録を参考にして、問題を解決するために必要な情報かを考える時間をとる。 ・友達と記録を比較したり意見を交換したりしやすくなるよう、観察を整理し、正しく記録するよう指導する。 ・授業で学んだ言葉を用いてまとめるように指導する。
「地球」を柱とする領域	平均正答率は、市や全国の平均より低い。 ○結果やまとめから予想や理由を選択することができている。普段から読解し、思考する活動を行ってきたことで、力が身に付いていると考えられる。 ●正答の条件を満たして記述することに課題が見られる。 ●水の行方についての理解が不十分である。	・既習内容を基に、児童が問題を見いだすことができる導入を計画する。 ・用語を覚えるだけではなく、適切な用語を入れながら文章で記述ができるように練習をする。 ・実験や観察したことを既習の内容や生活経験と関連付けて、結論を導き出す学習過程を実践する。

宇都宮市立上河内西小学校 第6学年 児童質問紙

★傾向と今後の指導上の工夫

○「いじめは、どんな理由があつてもいけないことだ。」と回答した児童の割合は、100%であった。いじめゼロ集会を行い、いじめについて一人一人が考える機会を設けたり、いじめゼロ強調月間にはいじめを題材とした道徳の授業を実施したりするなど、いじめは絶対に「しない・させない・許さない」という意識を学校全体で意識づけることができている成果であると考えられる。今後も、いじめは絶対に許されない行為であることを学級・学校全体で徹底していく。	○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの
○「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができますか。」の設問の肯定割合は92.3%で、市や全国の平均を上回っている。また、「授業や学校生活では、友達や周りの人の考え方を大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか」の設問の肯定割合は、100%であった。各教科の授業において、グループ学習やペア活動を積極的に取り入れたり、学級活動の時間に学級の課題について話し合つたりするなど、考えを伝え合う場を多く行っている成果であると考えられる。自分の考えを相手に伝える力だけでなく、自分と友達の考えを比較したり、全体の意見をまとめたりする力も育ててきている。今後も、様々な活動において他者と関わり合い、協力し合ってよりよい学校生活が送れるよう支援していく。	
○「自分には、よいところがあると思う」と回答した児童の割合は92.3%で、市や全国の平均を上回っている。自分のよさや成長を実感できるような活動を積極的に取り入れることで自己肯定感の高まりが見られたと考えられる。今後も、特別活動を中心にして自分で考えやり遂げる経験をさせ、達成感を味わうことで、自分に自信をもって主体的に活動する児童を育成していく。	
○「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができますか」の設問での肯定割合は100%であった。毎時間の授業やテストの振り返りを通して、振り返りの習慣が付いてきている。今後は、児童がより何のために振り返りをするのかを意識できるよう、振り返りの視点をもたせるとともに振り返りが次の学習につながる単元計画をしていく。	
○「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか」の設問の肯定割合は、92.3%で、県や全国の平均を上回っている。児童は、課題に対して自力解決しようと進んで取り組むことができるので、今後は課題を多面的・多角的に捉えられるような発問の工夫を行ったり、違う解き方をペアやグループで考えたりする時間を設け、より深い学びに繋げていく。	
●テストの「解答時間は十分でしたか」の設問に「十分だった。」と回答した児童の割合は、国語で69.2%、算数、理科が77%であり、3教科とも県の平均を下回っている。基礎的な知識の定着だけでなく、日々の小テストや確認テストなどをを行う際に、時間を意識して解けるよう声掛けを行ったり、朝の学習等で文章問題に慣れさせたりするなどの指導を行っていく。	
●「国語の勉強は好きですか」についての肯定割合は46.2%で、全国の肯定割合を下回っている。「国語の授業の内容はよく分かりますか」や「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか」についての肯定割合は全国肯定割合を上回っているため、児童が国語の勉強に対して前向きに取り組むことができるようになっていきたい。分かりやすさと同時に、学ぶ楽しさや喜びを得られる授業を展開するため、学習課題との魅力的な出会いや、児童の興味関心が高まるような単元末に向けての言語活動を設定するなどの指導改善を行っていく。	

宇都宮市立上河内西小学校（第6学年） 学力向上に向けた学校全体での取組

★学校全体で、重点を置いて取り組んでいること

重点的な取組	取組の具体的な内容	取組に関わる調査結果
家庭学習の習慣化に向けた指導の工夫	今年度も、年度初めの懇談会で、家庭教育の重要性を話し、家庭学習強化週間を年2回実施することの協力を依頼している。	家庭学習については、9割の児童が学年でめやすとしている1時間よりも長く実施できている。これは、市・県の平均よりも高い。家庭での学習習慣が定着してきているので、さらに学びを自分のものとして捉えられるような学習方法を身に付けさせていく。
児童の自己調勢力を高めるための授業改善	児童が「見通し・学習・振り返り」の学びのサイクルを回し、自ら学びに向かうことができるよう、学習者にとって「分かる」「おもしろい」と感じる授業を展開するとともに、児童のメタ認知を促す自己評価と学びを価値付ける声掛けを行っている。	「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている」とすべての児童が肯定的に回答しており、学びに前向きな姿勢が見て取れる。一方で、国語と算数に対する好意的態度は、市や全国よりも低い。児童の学びに対する前向きさを生かすことができるよう、各教科の見方・考え方を働きかせ、その教科ならではの本質的な面白さを味わうことのできる単元デザインを行っていく。
授業における話合い活動の充実	授業の中に意識的に話合いの場を設け、互いの考えを伝え合うだけにとどまらず、友達の意見と自分の意見を比べて聞いて、考えを深めたり修正したりして練り合いながら話合いが行えるよう指導している。	「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と回答している児童は9割であり、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方方に気付いたりすることができます」としても9割であった。このことから、友達と対話し、多角的な視点で考えることに価値を見出していることが分かる。国語の「話すこと・聞くこと」の領域において、平均正答率が市や全国よりも高いことからも、児童に良好な変容が見取れるため、さらにICTなども活用しながら、話合い活動の充実を図り、児童が友達と学ぶ楽しさを実感できるようにしていく。

★学校全体で、今後新たに重点を置いて取り組むこと

調査結果等に見られた課題	重点的な取組	取組の具体的な内容
国語の知識・技能に関して、以下のような課題が見られた。 ・同音異義語を文脈によって適切に使い分ける力が不十分である。 ・図や表、記号などを用いて情報を整理し、関係づける力に課題がある。 ・言葉の変化や世代による違いに気づく力が弱く、日本語文化への理解が浅い。	言葉の意味や使い方を正しく理解し、自分の考えを表現できる力を育てる。語彙を増やし、文脈や情報の整理、日本語の文化への理解を深める学びを、他教科ともつなげて進めいく。	・同音異義語や意味の似た語を文脈に応じて使い分ける学習を充実させる。短文作りや文章の言い換え活動を通して語彙力を高める。 ・情報を図や表、マインドマップなどで整理する力を育てる場面を国語以外の教科にも広げる。 ・古典や昔話の音読、方言・世代の言葉の比較、文字の成り立ちの学習など、日本語の歴史と文化への理解を深める活動を計画的に取り入れる。